保育の心

原口　純子

研ぎ続けるものとは

平成八年八月にドキュメンタリー人間劇場「時を紡ぐ師と弟子」（テレビ東京）の再放映を見ました。これは、法隆寺金堂などの堂塔の復興や再建を果たした最後の宮大工棟梁といわれる西岡常一氏と、その弟子である小川三夫氏の鵤工舎の若き宮大工達の日常を描いたドキュメントです。これについては、『木のいのち木のこころ』天・地・人編（草思社）にもくわしいのですが、人を育てるという視点から非常に興味深いものでした。

私は幼児教育の現場で多くの幼児や保護者、保育者、主任と園生活を共にし、昨年春から幼稚園教諭の養成に携わってみて、保育者を育てるということがどういうことなのかについて考えていたのです。短大で一クラス五十人の学生を前に保育についての

知識や言葉を語り掛けても、油紙の上に水をまいているような空しさを感じます。例え、話をよく吸収してくれたとしても、保育の知識を持った人にはなるけれども、保育者を育てることにはならないのではないかとの疑念が残ります。

保育者は技術職人ではありませんが、職能を持った人を育てるという意味では、大工さんを育てる事も保育者の養成も一脈通じるものがあります。鵤工舎は徒弟制度で師と弟子は生活を共にして知識として学ぶというより、体を通して知識も技術も精神も身につけていく様が描かれています。建築概論や寺社造営学を学ぶわけでもなく、親方と共に仕事をする中で技術も人間もまるごと成長します。入舎八年目の二十七歳の若者が何人もの職人をまとめ、十億と言われる大きな仕事の現場をまかされている様子に驚きを感じます。中でも印象深いものは、宮大工にとって道具は命であり、仕事の基礎は刃物の研ぎで、仕事をしている間は一生研ぎつづけるという事です。刃物の研げない大工は使いものにならないと言われて、入門した若者が、寸暇を惜しんで夜遅くまで水場で懸命に鐫（のみ）や鉋（かんな）を研いでいました。切れる鉋で削った表面は水を弾くが、悪い鉋で削った表面はけば立って水を吸い腐るのだそうです。無駄なものをそぎ落とし、一つの目的に向かって真剣に取り組む若者の群像が清々しく感じられました。

さて、保育に於いて、大工の刃物研ぎに当たるものとは何でしょうか。「これ」が幼児教育の基礎で、「これ」のだめな人は保育者として使いものにならず、保育を続ける者が一生研ぎつづける「これ」とは、幼児教育科の二年間に身につけるべきことも「これ」の基礎なのです。

「これ」とは技術でしょうか……どのような技術？知識でしょうか……どのような知識？

情熱、感性、人間性、人間力あるいは保育観、幼児理解でしょうか……保育者の要となるものとは何かを考え、それを育てる手立てを考えたいのです。

感性・人間性・育ち

優れた保育者を思い起こすと、暖かく誠実な人柄のA子先生、天衣無縫な闊達さのB子先生、そこにいるだけで場が明るくなるオーラを発散するC子先生、淑々とおとなしいけれども、上品でやさしさあふれるD子先生。幼児の動きや気持ちをよく見たり感じていて、クラスの幼児が生き生きと育つE子先生。それぞれの良さがあり、その保育者ならではの学級経営をしていたことを思い出します。これらの特性を見ると、その人固有の個性や感性、赤ちゃんの時から十分に愛されて育った、育ちの良さや人間性によるところが多く、良い適性を持った人が保育者の資格をもったに過ぎないともいえるのです。おとなしい人、地味な人、元気ではあるが雑な人、他の希望が叶わずやむなく入学した気持ののらない人、様々な学生が入学してくるのが短大の現状です。幼稚園教諭の資格を出すということは、特に適性があるとは言えない普通の人をどう保育者として育てるかということなのです。

幼児理解を身につける

研究会の紀要の今後の課題として「教師自身の感性や人間性を高めることが望まれます」などと結ばれています。やさしさや包容力や人としての魅力など、保育に当たる者に求められる究極の資質は恐らく感性や人間性なのだと思われます。けれども、問題を感性や人間性という言葉に包括してしまうと、

育ちや適性の問題になり、普通の人は保育者として養成できないことになってしまいます。もちろん適性は非常に大切なことです。

人間性という漠然とした言葉を保育者養成という視点から、さらに問題をしぼって見ると、「幼児理解」に行き着きます。

幼児教育を目指す者は少なくとも共感的、人間的理解を知識として知り、身に付いた行動とし、ひいては保育者としての人格にして欲しいのです。一人ひとりの幼児の立場にたって気持ちを添わせて受容する理解や、幼児を暖かく見守る包容力、カウンセリングマインドなどを、まず知識として知り理解するところからスタートし、幼児教育科での生活の中から、実感として人間理解を身に付けることが望まれます。そのためには、一人一人の学生自身が教師に受け入れられる経験や、心にとめて貰えている安心感、信頼感を経験する必要があるのです。

保育者を育てるということ

さて、奈良の鵤工舎は今日でもなお徒弟制度で若者を育てています。生活を丸抱えにして、親方は弟子の隅々まで知り尽くしています。そのようにして、親方は弟子の能力や性格、個性に合わせて教えたり待ったり、叱ったりして人格まるごと育てているのです。

かつては、保育者の養成も徒弟制度のような時代があったのです。

昭和四十五年度をもって廃止になった、お茶の水女子大学の幼稚園教諭の養成課程も一種の徒弟制度のようなしくみになっていました。一学年が二十四名で、附属幼稚園の建物の中に居室があり、部屋を出ると幼児が廊下をかけまわっているような生活だったのです。一年次から幼稚園のクラスに配属されて、週一日実習の日があり、担任の先生や幼児と

共に過ごし、幼児を理屈抜きに肌で感じとるというような生活です。クラスの担任の先生は養成課程の学生にとっても指導教官のようなもので、よろず学生の相談にものっていただき、ご指導いただいていたのです。授業は授業としてあったものの、幼児教育の原形となる保育観は、はっきり二年間の年間を通しての実習により培われたものと思われます。この二年間で幼児教育について学んだというよりは保育者として育ったと言う方が当たっています。

今日幼稚園の教諭は短大で、二年間に六十八単位を取得すれば、誰でも免許を取得し先生になることができます。幼児教育科の一学年一五〇人が幼児教育の科目を履修したとはいえるのですが、保育者として育ったといえるのは何人でしょうか。

もはや私達は徒弟制度に帰ることはできません。人を育てる徒弟制度のよさとは何かをつかむことにより、幾ばくかのヒントを得ることにします。

親方との信頼関係

少人数で、親方が弟子のことをよく知り尽くしていて、信頼関係があること。

一学年一五〇人もいて、五十人一クラスで授業だけで出会っているのでは、呼び出しを何度もかけた手こずる学生か、特徴のある学生以外名前がおぼえられないのです。名前と顔が一致せずにどうして信頼関係ができましょう。一授業単位を二十五人以下にして、名前も顔も良く知り合って保育関係の授業は進めたいものと考えています。

現場で学ぶ

宮大工にしろ保育にしろ抽象的思考ではなく、対象に合わせながら具体的に対応する仕事です。理屈だけがわかっていても、木を使いこなすことも幼児

を援助することもできません。幼児教育科において、教育実習は最も重要な科目です。

現在私どもの所では、一年次の秋に附属園で六日間、二月に学外実習九日間、二年次に学内希望実習六日間、学外実習三週間をとっています。実習を重ねる度に、学生の幼児を見る目や感じ方に、成長が感じられます。実習させて戴く幼稚園には大きな負担をかけているわけですが、現場での実習は学内の座学の何倍もの教育力を持ちます。それだけに、実習園と養成側は相互に信頼関係をもち、十分な連携をもって、良い実習成果を上げられるようにしたいものです。

保育の心を育てる

鵠工舎の若き宮大工の映像を見ながら、幼児教育を目指す人にとって一生研ぎつづけるものは何かを考えていました。それは深い幼児理解（人間理解）に根ざした、暖かな保育の心ともいえるものではないかと思い至ります。保育者を育てるということはプロフェショナルな保育の心を育てることなのです。それらは、知識と共にそれぞれの個人的体験を通して育てられるものです。保育者の養成は、学生を教育し主体性を育て、自信をつけ、教師との密な人間関係を通して、保育の心を育て上げることです。そのためには、少人数制にクラスを作り、名前も人柄もわかって授業することが望まれます。幼児教育科で学んだ者は進路のいかんを問わず、やさしく、暖かな保育の心の灯を持っていたらすばらしいことです。

（洗足学園短期大学）